

雪合戦のウインブルドン

昭和新山国際雪合戦



1年の3分の1近くを雪の中で過ごす北海道。耐雪、克雪といった受動的な域から踏み出し、積極的に利雪、親雪し、よりよい生活や文化を創造して行こうという取り組みが各地で進められている。こうした中

で、子供の遊びだった雪合戦をスポーツ競技化した昭和新山国際雪合戦は今年で15回を迎える。スポーツ雪合戦の総本山としての地位を確立した昭和新山の雪合戦のいまを見た。

季節による観光需要の波

鎖国下の18世紀末、英国探検船プロビデンス号のブロートン船長が、恵山、駒ヶ岳、有珠と、活発な噴煙を上げる火山が3つも見える姿に驚き、内浦湾をボルケーノ・ベイ（噴火湾）と呼び世界に紹介した。第二次大戦中、有珠山の山すその畑地に昭和新山が噴出隆起。当時の壮警郵便局長三松正夫氏の、戦時下の不自由な環境の中で地道に新山の成長を記録したミマツ・ダイヤグラムが世界から大きな賞賛を浴びた。

今では世界的にも有名で、道内から海外まで幅広く人々が訪れる一級の観光地といえる洞爺湖地域であるが、年間250万人の観光客のうち75%は4月から9月までの夏場で、残りの25%も10月から11月まででほとんどを占め、冬場は閑散としている。近隣の温泉地登別は、山の懐にあり、すぐ近くで地獄谷が煙を上げ、温泉地全体に暖かい印象があるのに比べ、この地域は広い洞爺湖の



水辺が寒々しい印象を与えるのだという。それでもさっぽろ雪まつりの頃には、札幌や小樽、函館などの他の観光地と組み合わせた旅行需要で、入り込み客数は一時的に札幌市内の宿泊キャパシティをも上回ることがある。この夏場や雪まつりシーズンへの偏りを解消し、通年で安定した観光需要を喚起したいという願いがこの地域にあった。

東南アジア観光客の行動がヒントに

こうした現状を打破するため、1987年に町の若手によるアイデア検討会が結成された。スキーマラソン、雪像、犬ぞり大会など数々のアイデアが出されたが、そのどれもが北海道内至る所で既に行われているもので、しかも時期まで皆集中している。出されたアイデアの中には雪合戦もあったが、雪国に暮らす者にとっては誰でも知っているあまりにもありふれたことと受け取られていた。そんな中、当時増え始めていた東南アジアからの観光客のことが話題になった。

新千歳空港で飛行機から降りた後すぐにバスに乗り、最初に雪のある場所に立つのがこの地であることが多い。生まれて初めて雪を目の前にしたとき、彼らの誰もがまず雪を触る。成分は水だから害はなく、ぶつけても倒れ込んでも痛くない。誰の財産でもないから少々拾っても捨てても誰にもとがめられず、しかもそれがあたり一面に無尽蔵とっていいほどある。しかもそれはこの世で何よりも白く美しい。初めて見れば狂喜乱舞する

のも当然とさえいえる。そして彼らは互いに雪をかけあい、雪球をつくってぶつけあう。教わったわけでもないのに、誰もがそういう行動に出るのはもはや人間の本能といえるのかもしれない。

スポーツ競技としての雪合戦

雪がとてつもない価値を持つ資源であることに気づき、アイデア検討会は「雪合戦」をイベントとして開発することを決定した。単なる雪遊びならば雪があればどこでもだれでもできるので、イベントとして長く育てていくために、ルールを定め、「スポーツ競技」化することにした。そして当初から「国際」の名を冠し、世界に広めることを目標とした。

1988年4月、ルール制定委員会を設置。既存のあらゆるスポーツを参考にルールを組み立て、さらにはゲーム性を高めるためにテレビゲームの要素も取り入れた。6月に原案ができ、その後細かいディテールを詰め、12月には世界初の「雪合戦のルール」が完成した。

町全体が一体となって

北海道の雪は比較的サラサラで、雪球ができにくい。また公正な競技のためには一定の雪球を維持する必要もある。そのためにタコヤキ器のような雪球製造器を開発した。町内の果樹農家とのつながりで、余市町で農機具を製作する業者が、本業が一段落する冬場に製作を手がけた。スポーツ店や靴屋さんが、綱引き用のヘルメットをベースにオートバイのシールドを組み合わせてヘルメットをつくり、シェルター・シャトーの作り方は大工さんが伝授した。人前で話したことのない町民を講師として道外へ派遣したり、協賛企業との折衝などを通じて人づくりにもなっている。会場の設営から豚汁の調理に至るまで、人口3千人余の町で実に400人ものボランティアが、職業の枠を超えあらゆる形で実行委員会を支える。まさに町をあげての一大イベントとなった。

さらなる向上のために

1993年には日本雪合戦連盟を結成。この傘下に北海道雪合戦連盟をはじめ、九州に至るまでの全国広



い地域の団体と連携し、現在も拡大を続けている。

当初のルール制定委員会は発展的に解消され、日本雪合戦連盟傘下の全国各県からの委嘱でルール制定委員会を組織し、大会を重ねるごとにフィードバックしてルールを見直し洗練している。また、スポーツ用品メーカーとともに用具を改良し商品化。雪球の質の維持や、プレーヤーの身体的観点からの雪球の固さや防具の改良などのために、北大低温科学研究所や国立札幌病院といった専門家の協力も得て、競技の完成度を高める努力を続けてきた。

雪合戦のウインブルドン

現在は全国各地のほかフィンランド、ノルウェーなどでも雪合戦大会が開催され、主にこれら大会の上位チームが毎年2月最後の週末に昭和新山にやってきて最高峰を競い合う。まさに「雪合戦のウインブルドン」の様相を呈してきている。海外からの各国単独チームのほか、英会話講師の団体や、JICAを通じた団体など、多国籍の混成チームもあり、欧米はもとより、アジア、アフリカ、中南米まで、幅広い国籍の人たちが参加し、いまや世界の「YUKIGASSEN」。国際色も豊かになってきている。

2001年には、雪国・北海道にふさわしい、次世代に継ぐべき新しい文化を創造、普及させたとして北海道遺産にも選定され、また、2002年1月には、世界に開かれたまち総務大臣表彰（民間国際交流団体部門）を受賞した。ゆくゆくはオリンピックの種目のひとつとなれるよう、国内外の団体と連携して活動していくという。

壮瞥の町で生まれたスポーツ雪合戦だが、今は世界で育っている。平和の祭典の場で純白の雪球が飛び交う光景が見られる日が来るのが楽しみである。

全国勤労者ふるさと交流会第10回北海道大会 第15回昭和新山国際雪合戦大会

2003年2月22日(土)～2月23日(日) 壮瞥町 昭和新山山麓

お問合せ：昭和新山国際雪合戦実行委員会／有珠郡壮瞥町字滝之町245 壮瞥町役場経済課内 TEL 0142-66-2244 <http://www.yukigassen.jp/>